

朝日新聞掲載(全国版)



課題と展望

>15<

東京都杉並区に住む工藤啓次郎さん(40)は、夏休みなどを除く毎日、都内の小学校の先生と会っている。

裁縫道具などの家庭科教材を学校に納入している株式会社「グッド」(資本金七百万円、社員十人)の社長。都内に約千四百ある小学校のうち、今年は三百五十校から注文を受けた。零細業者が多いこの業界では、最大手の部類に入る。

「学校に出入りしていて思うのは、家庭科をもう少し充実してほしいということだ。『教育』というけれども、算数や理科には『教』しかない。『教』と『育』を兼ね備えているのが家庭科なのですから」

「商売を度外視して」と前置きした上で、工藤さんはさらに続けた。「それぞれの学級担任が、家庭科についての十分な知識・技術を持っていないことが理想です。でも、なかなか難しい。だとすれば、家庭科の専科の先生をもっと学校に置くべきだと思うのです」

専科教員

東京都教育委員会の検定課によると、二人しか専科教員を置かない学校では、音楽と図工の教員を配置することが多い。音楽会や展覧会といった学校行事を行うためには、その二つの教材の教員は欠かせないらしい。

三番手の家庭科の専科教員は、学級数が減ると置かなくなる。東京都内の小学校の学級数はこの十年ほどに約二千減っており、これに伴って家庭科の専科教員も少な

配置する学校は減少

「教」と「育」併せ持つ

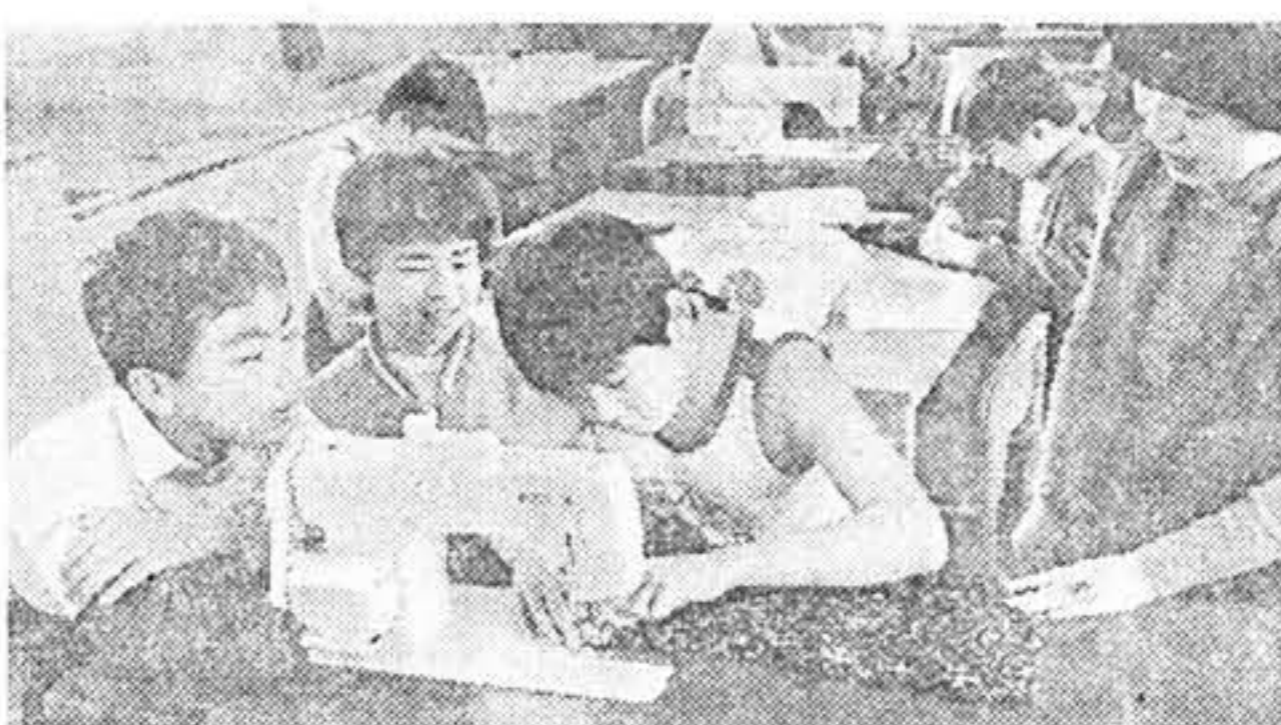
授業内容をどう充実

東京都久留米市立滝山小学校の福田三津夫教諭(56)は、前任の清瀬市立第七小学校で五十四年度から六年間、家庭科の専科教員を務めた。

「専科教員をしているものですから、私もただん家事をやるようになったわけです。そろした中で、食の安全性の問題など、今の生活のありようはまずいんじゃないかと気付いた。理科や社会に

も生活を教える場はありますが、こころをわかってもらうことが家庭科をやったら面白いんじゃないかと」

東京都足立区東原北小で、男子も女子も「きょうはミソシイ実習」。男の子も女子も「きょうはミソシイ実習」



「専科」といっても、調理や裁縫などの手先の技術だけを重視する先生もいます。一方、学級担任が教える場合には、給食やそうじなど日常生活の場面を生かせる、という良さもあります。自立して生きていく力を子どもたちにどうつけていくか。専科にも学級担任にもこれが問われるのです」

「一般論としていこうと、学級担任の教師がすべての教科を十分に研究して授業するというのは、時間からいっても実際上不可能な